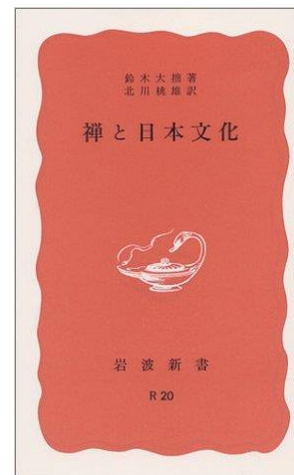


* 本書は著者が欧米人の為に行った講演を元に英文で書かれたものを、1940年に北川桃雄が日本語に訳した古典的名著（現在第86刷）

第1章：禪の予備知識

- ・内外権威者の多くが、“禪宗が日本人の性格（道徳的・修養的・精神的）を築く上で重要な役割を果たした”と認識（ex. サー・チャールズ・エリオット「日本仏教」、サー・ジョージ・サンソム「日本文化史」）
- ・禪は初唐（8世紀）に中国で発達した仏教の一形態
- ・起源は6世紀の初め南インドから中国に来た**菩提達磨**（ホツダマ）がもたらした**大乘仏教**
- ・禪の目的：仏教の発展に伴い堆積した「皮相な見解」を除去して**仏陀の精神を直接見る**こと
- ・**仏教の真髄**＝**般若**（ブラジュニヤ、智慧）：事物の現象的表現を超えてその実在を見得する力
 十**大悲**（カルマ、愛）：無生物を含む一切の存在に愛が浸透するとき、結局成仏する
- ・**禪は無明**（アヴィディヤ）と業（カルマ）の密雲に包まれて、我々の内に眠っている**般若を目覚めそうとするもの**
 - * 無明と業は無条件に知性に屈服する、その知性は論理と言葉によって現れる⇒ 禪は自ら知性を蔑視
 - * 知識の価値は事物の真髄が把握された後に始めて知ることが出来る
- ⇒ 禪が我々の般若を目ざます場合、**認識の普通のコースを逆にしたやり方**で精神を鍛える
 - * 宋代の五祖法演の説話：「禪とは夜盗の術を学ぶに似たるもの」⇒ **真理がどうあろうと、身を持って体験**
 - * 知的作用や理論化は工業製品を造るのには向くが、魂の直接表現である芸術品を創る場合などは「伝え難い」
- ・禪のモットー：「**言葉に頼るな**」（不立文字）⇒ 科学又は科学的事象とは正反対
 - * 科学＝非体験的、抽象的、系統化、言葉が必要
 - * 禪＝体験的、個人的、非系統化、言葉は妨げ⇒ **実体こそが最も高く評価される**
- ・知識には3種類
 - ① 読んだり聞いたりして得るもの（いわゆる知識の大部分）
 - ② 科学的と普通言われているもの（観察と実験・分析と推理の結果）
 - ③ **直覚的**な理解の方法によって達せられるもの ← 禪が呼び覚まさんとするところ（我々の存在の深部から）
 - * 科学的知識は完璧ではなく、異変（エマーゼンス）が起きたとき、咄嗟に過去に貯めた記憶の全てを喚起できない
 - * 直覚的知識は、あらゆる宗教的信仰の基礎を形成しており、**最も能率的に危機に応じられる**



第1章：禅の予備知識～続き

<禅の特徴(まとめ)>

- ① 禅は精神に焦点をおく結果、**形式(フォーム)を無視**する
- ② 即ち、禅はいかなる種類の形式のなかにも精神の厳存をさぐりあてる
- ③ 形式の不十分、不完全なる事によって、精神がいつそう表れるとされる
∴形式の完全は人の注意を形式に向けやすくし、内部の真実そのものに向け難くするから
- ④ 形式主義(フォーマリズム)、慣例主義(コンベンションナリズム)、儀礼主義(リチュアリズム)を否定する結果、**精神は全く裸出してきて、その孤絶性(アローンネス)、孤独性(ソリタリネス)に還る**
- ⑤ 超越的な孤高、または、この「絶対なるもの(アブソルート)」の孤絶がアスセチシズム(**清貧主義**、禁欲主義)の精神である。それは全ての必要ならざるものの痕跡を、いささかも止めないということ
- ⑥ 孤絶とは世間的の言葉で言えば**無執着**ということ
- ⑦ 孤絶なる語を仏教者の使う絶対という意味に解すれば、それは最も卑しいと見られている野の雑草から、自然の最高の形態といわれているものに至るまで、**森羅万象の中に沈んでいる**

第2章：禅と美術

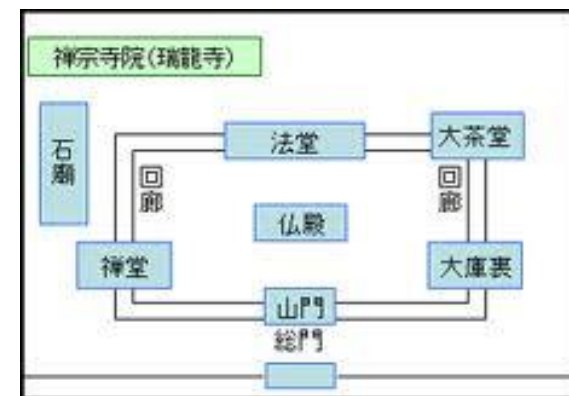
- ┃：・禅以外の仏教各派が日本文化に及ぼした影響の範囲は、ほとんど生活の宗教的方面に限られたが、ひとり禅はこの範囲を逸脱し、国民の文化生活のあらゆる層のなかへ深く及んでいる
- ・中国では事情が同じではないが、注目すべきは、禅が宋学の発達及びある派の**絵画の発展に刺激**を与えた事
 - ・日本人の芸術的才能の特色の一つ：**「一角」様式**(南宋の大画家馬遠に源を発した様式)
 - *この様式は、心理的には「減筆体」(絹本や紙本にできるだけ少ない描線や筆触で表現する様式)の伝統と結びついている
- ⇒ ex. 馬遠の「寒江独釣図」は「孤絶」の禅的感じを目覚めさすのに十分
- *この小舟の頼りなさこそがこの漁舟の美德、一切を取り囲む「絶対なるもの」の不可能を感じる
 - ・また「枯枝の上の孤独の鳥の図」では、人の気分を多少もの思わしげにさせるが、内的生活に注意を向ける機会を与えるもので、多様性の中に超越的な孤絶性—日本では**“わび”**と呼んでいるもの—を我々は鑑賞する



第2章：禅と美術～続き

- ・“**わび**”の真意は「**貧困**(ホウアティー)」、即ち「時流の社会のうちに、またそれと一緒に、おらぬ」ということ
 - * 貧しいということ、即ち世間的な事物(富・カ・名)に頼っていないこと、しかもその人の心中にはなにか時代や社会的地位を超えた、最高の価値を持つものの存在を感じる
- ・“**わび**”道は日本人の文化生活に深く入っている⇒ 禅の心的習慣がこれを助けてきた
 - * 「文明化」した人工的な環境に育つようになって、自然の生活状態に遠くない原始的単純性に対して憧憬の念を持っている
 - ∴ 市民は夏森でキャンプをやったり、砂漠を旅行したり、自然の懐に帰って、直接その鼓動を感じようと欲する
- ・精神の重要さをあまりに注意・強調すれば、**形式無視**という結果をきたし、「一角」様式と筆触の経済化による不完全どころか醜というべき形の中に、美を体現することが日本の美術家の得意技の一つ
- ・この**不完全の美**に**古色**や**古拙味**(プリミティブ・アンターズネス)が伴えば、日本の鑑賞家が賞美する“**さび**”が表れる
 - * “さび”は鄙びた無虚飾や古拙な不完全に存する、見た目の単純さや無造作な仕事ぶりに存する、また豊富な歴史的連想に存する⇒ 茶室内に用いられる道具類は多くかかる性質のもの
- ・昔の茶の宗匠が、**茶の湯の指導原理**たる“さび”を最もよく言い表すとして、あげた歌：

花をのみ待つらむ人に
山里の雪まの
草の春を
見せばや (藤原家隆)
- ・日本の芸術に著しいいま一つの特色は「**非相称性**(アンシンメトリー)」「(「一角」様式に由来)
 - ex. 仏教寺院の建築物の配置：山門、法堂、仏殿など主要な建物は一直線に建っているが、二次的または従属的な建物は、主要な線の両翼として相称的に並べられることはない



- ・芸術の訴える力は端的に人間性に喰い込む
 - * 道徳は規範的(外部からの挿入)だが、芸術は創造的(内部からの抑えがたい表現)
 - ⇒ 禅はどうしても芸術と結びついて、道徳とは結びつかない
- ・芸術の持つ非均衡性・非相称性・「一角」性・貧乏性・単純性・“さび”・“わび”などの観念は、全て禅の真理「**多即一、一即多**」を中心から認識するところに発する

第2章：禅と美術～続き

II：・禅が日本人の芸術衝動を刺激し、作品を色づけた理由は、**鎌倉・室町時代に禅院が学問芸術の貯蔵所**になった事、禅僧が終始外国文化と接触する機会を有した事、貴族と支配階級が後援者(パトロン)であった事など
 ・天台・真言・浄土諸宗は日本人に仏教精神を深く浸透させる上に寄与、禅はその後に日本に入ってきて、直ちに部門階級の支持を受けた

* 貴族は当初禅に反感を抱いていたので、禅は京都を避けて鎌倉の**北条一族の庇護の下に興った**

* 京都の朝臣たちの優美洗練と対照をなす関東武士の「剛毅果断」は、**禅を武士道精神と結びつけた**

・「**一即多、多即一**」は汎神論(パンスイズム)と誤解されやすいが、禅では一なり多なりというものがある、それぞれ一方が他方の中にあるという意味ではなく、**二つのものはいつも同一性**を持っていて分けるべきでないとする

* 般若経の語で言えば「**空即是色、色即是空**」である：空は「絶対」の世界、色は特殊の世界

* 絶対的意味における空とは、分析的な論理概念ではなくて、体験事実そのままを指す⇒ **直観を素直に認めること**



北条 時頼

第3章：禅と武士

・慈悲の宗教である仏教、中でも禅は先述のように当初から道徳的及び哲学的に日本武士を支援した

* 道徳的：禅は一たびその進路を決定したら振り返らぬ事を教える⇒ 武士は戦闘中に振り返ったりよそ見をしてはならない

* 哲学的：生と死を無差別的に取扱う⇒「**武士道**というは、死ぬ事と見つけたり」(葉隠)

・上杉謙信も武田信玄も熱心に禅を学んでいた

* 「生を必するものは死し、死を必するものは生く。…生を惜しみ死を厭うが如きは、未だ武士の心胆にあらず。」(謙信)

* 信玄は戦いの最中に禅寺の招きに応じて桜を賞した⇒ 利害を超越した自然の享楽を「**風流**」と呼ぶ

さそはずば くやしからまし桜花
 さてこん春は 雪のふるてら

・禅は行動することを欲する⇒ ひとたび決心した以上、振り返らずに進む武士の宗教
 ⇒「**潔く死ぬ**」

* 日本人は別段、生の哲学は持たないかもしれぬが、たしかに死の哲学は持っている



上杉 謙信

第4章：禅と剣道

I：・「**刀は武士の魂**である」⇒ 刀が果たすべき二重の務め

① 持ち主の意思に反するいかなるものをも**破壊**する⇒ 愛国主義や軍国主義の精神

② 自己保存の本能から起こる一切の衝動を犠牲にする⇒ **自己犠牲**という宗教的な意義

・禅は“**活人剣**”と“**殺人刀**”ということ語る

* 文殊菩薩は右手に剣を、左手に経典を持つが、この聖なる剣は生き物を殺すためではなく、我々自身の貪欲・瞋恚・愚癡を殺すため（ムハンマドの持つ剣とは意味合いが異なる）

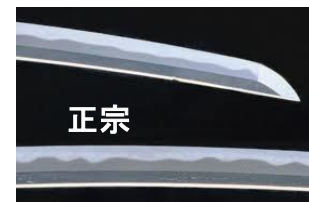
・刀鍛冶が刀を作る時には、守り神の助けを祈りつつ、智力・体力・精神力の限りをつくす

⇒ **日本刀は作家の魂が深く入り込んだ芸術品**：破壊の武器としてではなく**靈感**（インスピレーション）の対象

・名刀正宗と村正の切れ味を試した実験（伝説）：上流から流れてくる枯葉に向かって水流に刀を置いた

* 村正の場合、出会った枯葉はどれも2つに切られたが、正宗に対しては木の葉は触れることなく避けて行った

⇒ 正宗は人を切ることに関心をもたなかった、それは切る道具以上に超人的であった



II：・攻撃と防御のための大刀と、必要なときには自害するための小刀の大小長短の二刀を帯びた武士にとって剣道の技はきわめて熱心に練磨せられるべきものであった

・柳生但馬守に送った**沢庵和尚**の書簡「**不動智神妙録**」

* 仏教の示す52の精神発展段階の一つに「止まる」があって、これに至ると人は一点に定着して自由に動けなくなる

⇒ この段階を沢庵は「**無明住地煩惱**」と言っている

* 兵法において、住地とは心の止まる所で、敵やその太刀に心を止めれば、敵に心をとられ、逆に我が身や我太刀に心を置いて同じである⇒ この“止まる心”を“迷”という

・**不動智**：不動といっても石や木のように動かないのではなく、心は自由に動きながら、ちっとも止まらぬ状態

* 千手観音も一所に心を止めないから千本の手が皆用に立つ⇒ 百足の話を連想させる

* 仏教徒の修行も同じで、その最高の段階に到達すれば、仏陀のことなど何も知らぬ無邪気な子どもと同じ⇒ 不動智 = 無智

第4章：禅と剣道～続き

II：・「間髪を容れず」、「石火之機」

* どちらも心の止まるべき間のないことを言っているが、単にタイミングが早い事ではなく、心を物に止めない事が重要
ex. 人から話しかけられたとき、直ちに「諾」と答える(いかなる用かと考えると心が止まる)⇒これが「不動智」

・「本心妄心」、「有心之心、無心之心」

* 本心は一所に留まらず、全身全体に延び広がりたる心：水の如く一所に留まらない＝無心
* 妄心は思いつめて一所に固まる心：氷の如く固まって自由に使えない＝有心⇒心を溶かすべし

・「無心」：一人の樵夫と“さとり”という動物の逸話

・「水月」：剣道の最後の段階で、十分資格のある師範にだけ与えられる奥義

* 水のあるところ、いかなるところにも、月が「無心」の状態で映る、その映り方を会得すること

うつるとも月もおもはず
うつすとも水もおもはぬ
広沢の池

III：・スペインの闘牛士に見る剣道との類似性：闘牛はスポーツではなく、一つの芸術⇒「不動智」

IV：・神陰流：上泉伊勢守が足利時代に創設した流儀、その秘伝は鹿島の神から直接授かったと主張

* この流儀の師範となる者に与える最後の証書(免許・皆伝書)には一円相のほか何も書かれなかった
⇒これは照り輝いて一点の曇りなき鏡を表しており、仏教の大円鏡智の哲学、即ち「不動智」に例えた

・免許皆伝の目録にはまた剣道の極意に関し、詩的警句として数首の歌があり、
確かに禅の精神を反映している

打つことは打つためと考えるものあり
されど打つは打つに非ず
斬るは斬るに非ず

勝利は帰す
闘いの始まるに先立って
太源の無心境に住し
自己を思わざるものに

V：・「剣道においてその技術以外に最も大事なことは、その技を自由に駆使する精神的要素」(高野弘正)

* これは「無念」または「無想」という心境⇒ 思想・反省や全ての愛着を断って生来の能力を働かせる＝「無我」の境地

・禅と剣道とは、究竟において生死二元を超越することを目的とする点で一である

* 偉大な剣士は例外なく禅門を叩いた(ex. 柳生但馬守と沢庵、宮本武蔵と春山)

* 剣や槍の師範はしばしば「和尚」と称された、また剣道を練磨する広間を「道場」(梵語の原意は「悟りの場所」と称した

* 剣士がその技を完成させるために行う「武者修行」は、禅僧が最後の悟りに達するための「行脚」を受け継いだもの

<私なりの理解>

禅 = 示 + 単

*このように分析すること自体が禅の思想に反するが...

即ち

- 生活も思想・哲学も全てシンプルにし、そこに美学を示す
- 生と死、往と復のように二つに分けるのではなく一とする
- 直観・直覚を第一とし、言葉や論理は二の次とする
- 禅は日本文化の深層に多大な影響を及ぼしている
ex. 美術、茶道、武士道、剣道